「**イエス、偽善を問う**」（ルカによる福音書一一章三七～四四節）

1　イエスとファリサイ派

今日の箇所、説教のため、単独でよく取り上げられる箇所とは、必ずしも言えないところです。一つの福音書をつづけて読んでいく中で出会い、立ち止まる、そうした箇所の一つです。

しかし立ち止まらされるということ、それはすでに一つの恵みなのではないでしょうか。読み飛ばされがちな御言葉によく聞くように、よく学ぶようにと、聖霊によって導かれているからです。

今日の最初のところに、イエスがあるファリサイ派の人から食事の招待を受け、「その家に」入って行ったことが書いてあります。少し先、次の段落、五二節には、イエスがその家を出て行ったことが書いてあります。今日の話は、その一人のファリサイ派の人の家でのこと、食卓でのことです。一回で済ませたいのですが、長いので二回に分けて取り上げます。

ところでファリサイ派について、少しおさらいをしておいたほうがいいかも知れません。

ファリサイ派というのは、ユダヤ教の一派です。対抗勢力としてサドカイ派というのがありましたが、サドカイ派が、神殿を中心として、祭司と結びついていたのに対して、ファリサイ派は、神の言葉としての律法、掟を重んじ、その順守を生命として成立した党派です。

彼らは律法を生活のすみずみまで適用させようとしました。そのため律法研究にも励み、場合によっては新しい規則もつくったりしたのです。そしてそれを厳格に守ることを自らに課しただけでなく、人々にも求めたのです。各地の会堂の組織を通して、一般民衆の間に大きな影響を与えていました。律法学者というのも、多くはファリサイ派でした。

律法を守るための規則、施行細則のようなものもつくったと申しました（「昔の人の言い伝え」と言われているもの）。今日の箇所で問題になっている、食事の前に手を洗う、というのも、じつはこの言い伝えの一つです。それも、律法と同じ権威をもつものとして順守が要求されていたのです。

これだけの律法へのこだわり、それ自身は、賞賛に値するものかも知れません。そういう意味では立派なのですが、ご承知のように、イエス・キリストを、目の敵として、ことごとく対立し、最後は、ユダヤの宗教と政治を支配していた人たち、祭司や長老たち、あるいはヘロデ党の者たちと一緒になって、ローマ総督ピラトに訴え出て十字架につけたのです。

この対立は、すでに私ども、これまで何回も見てきたところです。すでにガリラヤ時代、イエスが宣教に立たれたときから、つきまとい、命を狙っていたことを、私ども知っています（五・一七）。

振り返ってみれば、ファリサイ派の人が、イエスとその弟子たちに関して問題にし

たことはいつも同じ、決まっていることを尊重していない、決まっていることを守っていない、というようなことでした。

たくさんありますが、例えば、安息日に、イエスがいやしを行ったことがとがめられたことがありました（六・六以下）。この場合決まっていたことは、安息日はまさに人間が何もしない日、ですから、いやしも、人を助けることだって、それは人間が何かを行うことには違いないのであって、人を直すこと、いやしは、してはいけないということになるのでしょう。

しかしそれは、あまりに非人間的なことではないでしょうか。そして神様の本質からして、憐れみの神の本質からして、そのように神様がお考えになることはないはずです。神の憐れみを、人間の決めたことが邪魔をしている、ということにならざるをえないのです。

イエスにとって、決められたことにのっとることが、最重要な課題ではなくて、神の御心に一致することが問題なのです。それゆえ神の根本的な思いを問い、それに従うことなのです。

こうして考えると、ファリサイ派の人とイエスはまったく別の平面に立っているように見えます。それゆえ、その対立は厳しいものになります。今日の箇所のように攻撃的と思われるほどになります。

2　偽善

イエスのファリサイ批判を伝えている箇所で、今日の箇所ほど、厳しいところはありません。そのきっかけは、食事に招待されたイエスが、食事の前に手を洗わなかったことでした。

> イエスはこのように話しておられたとき、ファリサイ派の人から食事の招待を受けたので、その家に入って食事の席に着かれた。ところがその人は、イエスが食事の前にまず身を清められなかったのを見て、不審に思った（三七～三八節）。

ところで、イエスがファリサイ派の人から食事の招待を受けるのは、ルカによる福音書では、今回がはじめてではありません。二度目です。前回は、ファリサイ派のシモンという人がイエスを招き、食事の席に現れた一人の罪の女の赦しが宣せられました（七・三六以下）。私どもも、すでに読んでいます。

ファリサイ派の人からの招待、それは一方で、彼らがイエスに対しても開かれていることを示しています。しかし他方、いつもどこかに緊張をはらんでいて、一つの「試み」も意味したようです。

早速問題になったのは、イエスが食事の前に手を洗わなかったことでした。いうまでもなく、これは、衛生上の問題ではありません。「身を清めなかった」という問題です。いわば宗教上の問題です。神の前で、それでいいのか、という問題です。

この場面の記事が、マタイ（一五・一～二〇）とマルコ（七・一～二三）にもあって、比べてみると、面白い違いがあります。

ルカでは、イエスご自身が手を洗わなかったことで、「不審に」思われたわけですが、マタイとマルコでは、イエスの弟子たちが手を洗わなかったことで、ファリサイ派の人がイエスを問い詰めようとしています。

このマタイとマルコでも、詳しく見ると違いがあり、マタイでは弟子たちみんなが手を洗っていなかったようにも見えますが、マルコでは、手を洗っていなかったのはその一部であったと、はっきり書かれています。マタイとマルコで、イエスはどうかといえば、イエスは、これはルカも同じ（九・一六）、食前には、祈りをささげていました。

いずれにせよ弟子の中に、師イエスと同じく手を洗わない者だけではなく、清めの言い伝えに従って手を洗っていた者もいたのです。そしてイエスはそれをとがめていなかった。少なくとも洗っている者に、それを止めさせることはなさらなかった。何よりそこにファリサイ派との違いがあります。イエスは「言い伝え」にもとづいて手を洗っている者も許容し、ファリサイ派の人々は、洗わない人の存在を少しも認めようとしなかったのです。

イエスにとって、食前に手を洗う、清めることは、「人間の言い伝え」（マルコ七・八）にすぎなかったのに対して、ファリサイ派にとって、人間の決めたものが、あらゆるものの物差しであり、それに合わないものは排除されるのです。こうしてファリサイ派は、いわば同質性を求め、異質なものを許さない。しかしイエスにとってはむしろ、そうした人間の言い伝えが、私ども一人ひとりの、神に従う純粋な思いを、妨げることがあってはならなかったのです。まずはそこに、イエスとファリサイ派、その違いが現れたことを知っておきたいと思います。

3　内も外も神の支配のもとに

イエスが手を洗わなかったのを見て、イエスを食事に招待した、「ファリサイ派の人」は「不審に思った」とありました。「不審に思った」には、いくつかの訳があるようです。「不思議に思った」（口語訳）、「驚いた」（聖書協会共同訳）。この言葉からすると、この人は、イエスを試みよう、陥れようとして招いたのではなかったように見えます。ともかく驚いたのです。

そうではあるものの、イエスの反応は、厳しいものでした。この彼に向かって、まるで彼がファリサイを代表する者であるかのように、「あなたたちファリサイ派の人々は・・・」と言い出したからです。

> 主は言われた。「実に、あなたたちファリサイ派の人々は、杯や皿の外側はきれいにするが、自分の内側は強欲と悪意に満ちている。愚かな者たち、外側を造られた神は、内側もお造りになったではないか。ただ、器の中にあるものを人に施せ。そうすれば、あなたたちはすべてのものが清くなる」（三九～四一節）。

ここから、今日の箇所の終わり（四四節）まで、イエスの厳しい言葉がつづいています。相手に息もつかせず、いくつものことが、語られます。こういうイエスは、ち

よっと例がないほどです。

ここでイエスがファリサイ派の人々に語った厳しい言葉の数々、全部を取り上げることはできません。

しかし、ここで語られていることを、ひと言で言えば、一二章一節の言葉を借りれば、ファリサイ派の人々のパン種、それは偽善だ、という言葉に尽きるように思います。偽善とは、いうまでもなく、うわべだけをよそおって、正しい人、善い人のように見せかけることです。

その厳しい指摘が、いまお読みした、最初の数節（三九～四一節）でなされているように思います。

ここに出ている、「杯」、「皿」、「器」、いずれも人間を指しているのでしょう。確かに人間は、神に造られた土の器です。

器に外側と内側があるように、人間にも外側と内側があります。外側は、他人に見えるところ、他人に見せる顔です。内側は自分だけが知っているところ、自分しか知らないと思っているところ、しかし神にいつも知られているところ、それが人の内側です。

いまイエスは、手を洗わないイエスを不審の目で見ているこの人に、彼の心の中を推し量って語りかけるのです。

不審の目で見ているあなたは、うわべだけを見て、人を判断している。手を洗う人は清い、洗わない人は清くないと。

しかし本当にそうであろうか。手を洗って清くなったとしても、それは、ただ目に見える、ただ外側だけのことではないだろうか。目に見えない、人の内側、心は、どうなっているだろうか。

そこまで見なければ、清いか、清くないか、分からない。もしかしたら、あなたの心は、強欲と悪意に支配されているのではないかのかどうか。それでも清いと言えるかどうか。もし、ともかく、手は洗ったから清いと言い張るなら、それこそ、欺瞞と言わざるをえないのではないだろうか。私は手は洗っていない。しかし、それは、私が清くない証拠ではない。私の心は、一心に神に向けられている、外も内もない、そこに純粋さ、清さがあり、それは、ただ神だけが知っておられることです。それゆえ手を洗う・洗わないという目に見える基準で、人間的な基準で、人を判断することをしてはならないと。

さらにイエスは言葉を次いで言います。「器の中にあるものを人に施せ」。少し分かりにくい言葉です。直訳は、内にあるものを施せ、です。新しい翻訳のように、「できることを施しとして与えなさい」（聖書協会共同訳）と理解しておきます。追求されるべきものは、偽善ではなく、真実の生き方です。偽善は、うわべだけで、ごまかす。その反対の真実の生き方は、内と外、外と内、その全体をもって、単純に、純粋に神の言葉に従うことです。

そしてその場合前提になっているのは、神は私どもの外側も内側もお造りになったということです。私どもの生、体も心も、私どもを取り囲む世界も、神のご支配のもとにないものはない。このことを真剣に受けとめることから、人間の真実の歩みは生まれるのです。

（一二月一二日）